

実践報告

日本のソメイヨシノと韓国コリョのワンボンナム（王桜）の授業
— 韓国高麗大生と考える —

三橋 広夫

日本福祉大学 子ども発達学部

The Lesson in Korea University about 'Someiyoshino' in Japan
and 'Wanbonnam' in Korea

Hiroo MITSUHASHI

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords : ソメイヨシノ, ワンボンナム (王桜), 「サクラ」言説, ナショナリズム, 日韓歴史教育

1. はじめに

2013年度の高麗大での授業実践「韓国高麗大生と学ぶ『富士山』の授業」¹では、帝国日本が作り上げた、そして「戦後」も確実に引き継がれている「富士山」言説を韓国の学生と分析しながら、その韓国人学生が持つナショナリズムをも分析することができた。また、韓国に暮らす日本人留学生の認識の一端をかいま見ることができた。

今回（2014年11月）の実践では、さらに日韓両国で身近に存在する桜に焦点をあてて、内在化するナショナリズムの問題を考えてみた。つくられた「サクラ」言説を近代日本や朴正熙政権パクチョンヒが国民統合²の手段として利用したことを探るとともに、国民意識に及ぼす具体的なありようを学生に提示することによって、学生の持つ意識を浮き彫りにしようとした。

特に今回の実践は、韓国の学生の認識を日本の学生がどう見るかを授業に組み込むことによって、交流の意味を持たせた。こうした意見交流こそが日韓の交流の原点

となることは明らかだが、大学生の意見交流は相互の認識の深まりにとって特に重要だと考えたからである。



雑誌や旅行パンフレットの3月号は決まって「桜」の特集を組む。

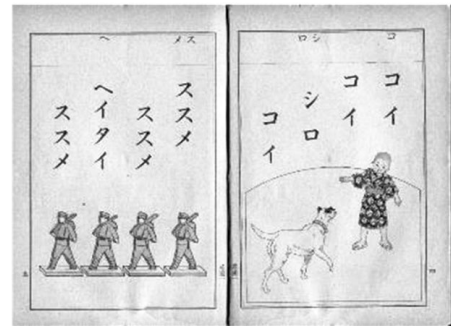
2. 授業の概要

(1) ソメイヨシノと国家主義

一例として弘前城の桜を紹介した。この城に初めてソメイヨシノが植えられたのは1882年のことだった。旧津軽藩士菊池楯衛たてえ・内山覚弥がソメイヨシノを植えたとき、士族なかまからは「城を物見遊山の場にするのか」と非難され、桜が引き抜かれたという。江戸時代の武士たち（あるいは他の人びと）にとっては「城には松がふさわしい」のであった。そのため、次ページの写真では



1890年代の弘前城三重櫓（天守）[『別冊歴史読本 73 日本の城原風景』 慎人物往来社, 1994, 19ページ]



『小学国語読本巻一』, 1993, 4-5ページ

桜は見えない。

この景観が変わっていくのが、日清戦争後である。そして、およそ120年後の現在では、4月下旬になると桜が満開である(右の写真)。日清戦争後、市民の寄付もあって急速にソメイヨシノが植えられていく。その風潮を加速させたのが、弘前市議会の皇太子(後の大正天皇)の成婚記念植樹の決議だった⁴。現在、弘前公園には約5000本の桜が植えられているが、ソメイヨシノがほとんどである⁵。



篠塚明彦氏撮影, 2014年4月29日

ちなみに、日本の「さくら名所100選」のうち、1897年~1945年に植えられた所が60カ所、それ以前のは18カ所、1945年以後が22カ所である⁶。

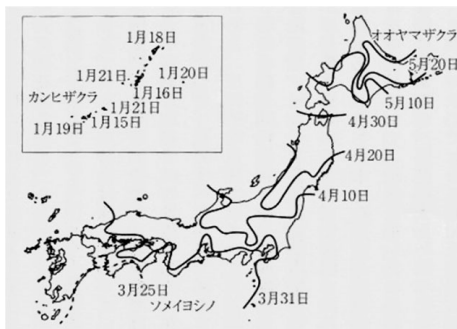
また、こうした動きは弘前ばかりではない。学校教育においても同様であった。国家主義的な教育を標榜していた『教育時論』には、一教師北村小次郎が「征清記念樹を植ゆべし」を投稿し、桜の植樹と国民意識の高揚を煽っている⁷。また、同じ雑誌に、徳島県麻植郡瀬詰尋常高等小学校教員高室由蔵は「庭に植うる大和桜は露西亜討つ三十七歳のしるしにぞなる」とロシアへの敵愾心を投稿した(『教育時論』710号, 1905年1月)。

その後、国定教科書第2期『尋常小学読本』に靖国神社⁸が登場し、「靖国神社八東京九段坂ノ上ニアリ。維新前後国事ニタフレクル人々ヲ始め、其ノ後ノ諸戦役ニ戦死シタル忠勇ノ士ヲマツレル所ナリ。……境内ニハ櫻最モ多ク、春ノ盛りニハ花ノ雲タナビキテ、『花ハ櫻木、人ハ武士』ノコトワザモ自ラ思ヒ出デラル」⁹と記述するようになった。

そして、「サイタサイタ サクラガサイタ」で始まる国語教科書が、満州事変後の1933年に登場した(『小学国語読本巻一』, 第4期国定教科書)。これを1ページめくると「ススススヘイタイスメ」とあり、軍国主義を小学生のうちから注入するための教育が推し進められていったことがわかる。このときに、「サクラ」言説が利用されていることに注目しなければならない¹⁰。城丸章夫が指摘するように、「小学校にさくらが植えられ、『さくらの花のように、パッと咲いてパッと散るのが日本人だ』と、小学校教師たちは、一生懸命教えただのである¹¹。こうした教育を受けた学徒兵たちも、例えば大塚晟夫は桜と戦死について感慨をもって記している¹²。桜が国家への犠牲を象徴するというイデオロギーが国民を戦争に動員した一例といえる¹³。その言説を、多くの知識人が「桜が散るところにこそ日本人の精神が宿っている」と煽ったことによって支えていった¹⁴。

(2) 戦後日本と「サクラ」言説

では、こうした国家主義的な「サクラ」言説は戦後日本で払拭されたのだろうか。その例証として小学校一年生の国語教科書を見てみた(学校図書『こくご』小1上, 2013)¹⁵。もちろん、1932年の国定教科書とは違って軍国主義を煽ってはいない。しかし、この単元は教科書の最初に配置されているから、どう考えても4月に行われる授業を想定している。そして、左の桜前線(開花日)を見てすぐに気づく¹⁶のは、4月初旬に桜ソメイヨシノをさす¹⁷が満開になっている地域は限られていることである。沖縄県や北海道の一部にはそもそもソメイヨシノがないのに、その子どもたちも4月初旬に桜が咲くように教えられることになる。つまり、桜が国民精神を象徴しているから、桜が実際には咲かない地域の子も「4月に桜が咲く」ものとして受けとっていくので



桜前線 (1961～1990年の平均, 気象庁)

ある¹⁷。

それをさらに裏づけるものとして、右の写真を見てみる。これは、4月の小学校入学式に合わせて文部科学省が全国の小学校一年生に配布する紙袋である。配布された教科書をこの中に入れて持ち帰るといふ。桜 ソメイヨシノをさす が満開である。



よく見ると、学校には「日の丸」 文部科学省製作の紙袋が掲げられている。この満開の桜と「日の丸」こそが「国民精神の象徴」だとするメッセージが込められているといえる¹⁸。

とは言っても、「花見」は楽しい。日本では、3月末から5月にかけて各地で花見が催されるのも、1960年代の高度経済成長期以後のことである¹⁹。

日本の桜は本来もっと多様な姿であったことを忘れてはならない。現在はほぼソメイヨシノ一色になっているが、江戸時代までの様相は違っていた。「サクラ」言説が軍国主義イデオロギーと結びつけられた1940年代に盛んに喧伝された本居宣長の「しきしまのやまと心を人とはば、朝日ににほふ山ざくらばな」は、決して散り際の美しさなどを語ってはいない。ましてや本居の慣れ親しんでいた桜はソメイヨシノではなく、ヤマザクラだった²⁰。

(3) 韓国の学生の意見

「日本の国語の教科書、紙袋の図案、桜前線の地図を見て、考えたことを書きましょう」として、学生の意見を聞いた。今回の受講生は24名である。以下、学生の名前はすべて仮名である。

なお、「日本福祉大学保護情報規則」に照らし、該当

学生の報告を匿名で記すことなどの同意書をとったことを付け加えておく。

「日本人は桜が好きだし、桜に対するプライドもかなりのようだ。地域によって開花時期が違ってもソメイヨシノを通して国民統合をなそうとしている。日本人としてのアイデンティティをソメイヨシノと結びつけて求めようとしているように見える。」(キム・ソンハ)

「今の日本の教科書、紙袋の図案などが首都圏の風景に合わせられている。首都圏では桜の咲く時期に入学式が行われるため、そのように描かれる。これは、これらを通して日本の子どもたちに『私たちは日本人だ。』という考えを植えつけようとするものだ。日本を象徴する桜を通して全国の子どもたちに日本人としての一体感を与えようとするものだ。」(ナ・ウンジェ)

キム・ソンハやナ・ウンジェは現在の教科書などから、国民統合の手段として桜が利用され、さらに「周辺」が「中心」に従属させられていることに注目している。

「学校周辺に桜を植え、入学式で配られる教科書や紙袋に桜が描かれていることを考えてみると、日本人にとって桜は身近な存在なのだろう。1890年代、1930年代に日本は戦争をしながら、小学校に桜を植え、ぱっと咲いてぱっと散るのが日本人だと教えた。日本人は日本の国家のために戦争に行くよう教えるためではないか。また、学校の周辺に桜を植えることで、毎年春になると『国家のために犠牲になること』を思い起こさせようとしたのだろう。」(チョ・ヒョンゴン)

「日本人にとって桜は身近な存在」だと感じたチョ・ヒョンゴンは、戦前の「サクラ」言説が国家のために進んで犠牲になる国民づくりのためのものであることを喝破した。

「満州事変などが起き、戦争に多くの若者を動員しなければならなかった。そこで小学校低学年から『兵士』としての日本人のアイデンティティを植えつけるために教科書が『ヘイタイスメ』で始まっていた。ぱっと咲いてぱっと散る桜の特性のように、日本人も戦争のためにぱっと散るのが日本国民としてのアイデンティティであることを比喩するためだ。今は教科書から『戦争』は消え、桜が春の花として紹介されているが、それでも紙袋に桜を描くなど日本国民のアイデンティティを桜の特性であるかのように仄めかしている。日本の小学校の入学式は4月初めだが、桜が咲く時期が地域によってそれぞれ違うため、ソメイヨシノが咲いていない地域もある。

それでも全国的に同一に配られる教科書や紙袋に、かつて戦争の時代に日本精神の特性だとしていたソメイヨシノを描くことによって日本国民に同一の、以前のような日本のアイデンティティを植えつけようとしているように見える。」(ユン・ソンウォン)

「教科書や紙袋の図案にも見られるように、桜を日本精神の象徴として教えている。桜に日本精神を込めて表現しながら日本のために忠誠を尽くした後美しく散る、という考えのようだ。学校のときからこれを強調し、そのような考えを継続して注入している。今は、桜を春の花として教え、気象庁も桜前線の資料を準備し、桜の美しさをあちこちで楽しんでいる。」(イム・ダスル)

戦前と戦後の違いを認識しながらも、「桜を日本精神の象徴」とすることは共通しているというのが、ユン・ソンウォンやイム・ダスルの意見である。

ここまでは、日本の「サクラ」言説についての考察なので、「サクラ」言説に潜むナショナリズムに強く意識していない。

(4) 韓国の「サクラ」言説

チネ
鎮海の桜は、

1905年日本人が軍港基地と市街地を建設しながら植えられた。光復後は、排日思想によって桜は日帝の残滓だ



鎮海の桜 (『鎮海市史』、口絵)

といわれ、その多くは切られて姿を消していた。しかし、1962年に朴万奎、夫宗 休ら二人の植物学者によって鎮海にもっとも多くあるワンボンナム(日本名、ソメイヨシノ)の原産地は、日本ではなく、わが国の済州島であることが明らかにされ、その認識が改められた。…… 8・15以後は、前記のように桜は冷遇され、寿命のつきる樹木もあり、かつての桜の壮観さを見ることはできなくなっていた。しかし、1960年代に入り、鎮海を観光都市に発展させる計画の一環として、わが国自生種のワンボンナムをもう一度植えて桜の名所にしようということになった。第1回目の植樹は、日本からワンボンナムの苗木2000本余りを市と郡とが共同で購入し、ポッ

コジャン [かつての「桜の馬場」、海軍統制部内、
チェファンサン
帝皇山公園と市街地に植樹を始めた。(『鎮海市史』、
1991、1264～1265ページ)

上は、『鎮海市史』の一部である。鎮海は「街全体が桜に埋め尽くされている」と言うほど、桜の多い街である。鎮海は、日本海軍がつくった軍港だった。そこに多くの日本人が押し寄せ、市街地が建設され、1910年代に大々的に桜の植樹が行われていった。その桜こそソメイヨシノであった。

だが桜は、解放後『市史』では「光復」と記述されている「日帝の残滓」であるとして切られていった。鎮海以外でも韓国全土でこうした光景が繰り返られていったといってよい。

ところが、1960年代に入ると、このソメイヨシノの「原産地は、日本ではなく、わが国の済州島であることが明らかにされ」、韓国人の桜観が変わり、鎮海市でも「わが国自生種」で街を埋め尽くそうと努力した²¹。『鎮海市史』にはないが、1960年代後半に、鎮海出身の在日韓国人片守介らが6万本以上の桜を市に寄贈した。鎮海にはいま30万本の桜があると言われるからおよそ5分の1にあたる。1965年の国交正常化から間もないこともあって苦労も多かったが、「在日のたましいを心のふるさに残しておきたい」(崔景鎬, 1935年生、兵庫県在住)という気持ちだったという²²。このことから、在日も巻き込んで「サクラ」言説が作動していることがわかる。

ここで、『鎮海市史』の記述を取り上げたのは、現在の韓国でもソメイヨシノ=済州島原産という言説が広く流布されているからである。そして、この言説が1960年代に入って形成されている点に注目すべきであろう。

はたして、ソメイヨシノ=済州島原産のワンボンナム(王桜)なのだろうか。

日本の植物分類学の基礎を築いた一人と言われる小泉源一が、この説を主張した嚆矢だった。彼は、ソメイヨシノの原産地は済州島である、幕末に済州島から吉野経由で江戸にもたらされたが、この朝鮮桜は通俗的で山桜のような気品がない、と言う²³。

ところが、この学説に疑問を持った竹中要は、小泉を訪ねたり、済州島に実際に出かけて調査をした。その結果、竹中は「ソメイヨシノは、エドヒガンとオオシマザクラとの雑種」だとする自説を公表した²⁴。小泉の学説

から約30年後の1959年のことだった。

このように、現在の日本では、小泉の学説は否定されている。DNAによる分析方法の進展によって、ソメイヨシノはエドヒガンとオオシマザクラの1回の交配によってつくられた雑種（ハイブリッド）である。現存するすべてのソメイヨシノはその1本の親木のクローンであることがわかっている²⁵。さらに、18世紀後半に伊藤伊兵衛（政武）という江戸の染井村の植木職人がつくり上げたとも推定されている²⁶。

これに対して、韓国人の研究者はどう考えているだろうか。1960年に朴万奎が、済州島^{ハルラサン}漢拏山のワンボンナムの自生地を調査し、1964年に韓昶烈が、漢拏山^{ハンチャンニョル}のワンボンナムの自生の状況から、ボンナム（*Prunus jamasakura* Siebold ex Koidz. var. *sontagiae* Nakai）とチェジュボンナム（*Prunus yedoensis* for. *nudiflora* (Koehne) Rehder, *Prunus yedoensis* var. *nudiflora* (Koehne)）の交雑種と確認した。さらに、1990年、金友吉^{キムウギル}が『*Korean Journal of Plant Taxonomy*』で、ワンボンナムは、コッパンナムのなかま（*Prunus jamasakura* cv）と、同じく漢拏山に自生するサングボッチナム（*Prunus maximowiczii* (Ruprecht) Komarov）の交雑であるとしている。

ところで、韓国のワンボンナムは、1908年に済州島でフランス人神父タケーが発見し、1912年にドイツ人植物学者ケーネがこれを新種として認めている。したがって、ワンボンナムが韓国自生の桜であることは間違いのない。問題は、このワンボンナムがソメイヨシノの原種であるかどうかということになる。

アメリカのポトマック河畔には多くの桜が植えられているが、その大半はソメイヨシノである。1912年から20年にかけて日本から贈られたソメイヨシノである。このソメイヨシノのDNA鑑定をアメリカ農務省が行い、済州島のワンボンナムとは別種であるという結論を出した²⁷。

ところが、例えば韓国KBSでは「花争い 桜の原産地は」という番組を2014年4月11日に放送している。中心は、「ソメイヨシノ＝済州島原産のワンボンナム」説の紹介である。先のアメリカ農務省の鑑定にも参加したチョン・ウンジュ博士は「この研究は日本側に有利になっているので、さらに研究を補充して新しい論文を書く予定だ」と番組の中で述べている²⁸。

問題はさらにある。韓国で植えられている桜のほとん

どがソメイヨシノだということである。済州島にもソメイヨシノが大々的に植樹されている現状からすると、ソメイヨシノとワンボンナムが違う品種であれば、交配が起こって自生のワンボンナムが消滅する可能性がある²⁹。

(5) 韓国の学生の意見

とすると、鎮海の桜（ソメイヨシノ）をはじめ韓国各地で植えられた桜は韓国自生種のワンボンナムではなく、ソメイヨシノである。は、1974年の朴正熙の大統領令による「桜の大植樹運動」が展開されて現在の姿になったが、この「桜の大植樹運動をどう考えたらいいのでしょうか」と、学生の意見を聞いた。

「朴正熙前大統領はそもそも親日的なのだから、『桜の大植樹運動』もそうした政策の一貫だと思う。しかし、桜の先祖を探る過程で朴正熙前大統領はソメイヨシノが済州のものだという研究結果を見て運動を展開したとも考えられる。日本がソメイヨシノを通して統合とアイデンティティを堅固にしたように、朴正熙前大統領も桜が済州の木（韓国固有の木）であることを聞いて韓国人としての自負心を確立させようとしたのだ。現在、汝矣島^{ヨイド}などで花見が盛んになっているのを見ると韓国の文化的側面に寄与した点も見なければならぬ。」（キム・ソンハ）

「朴正熙は親日派だという人がいる。『桜の大植樹運動』を見ると朴正熙は韓国を日本化しようとしたという批判は理解できる。ソメイヨシノはワンボンナムとは違う種であることは厳然としている。しかし、朴正熙が日本に憧れて『桜の大植樹運動』をしたと見るのは正しくない。朴正熙は、日本が桜を通して国家を統合するのを見て、それから学んで原産地が韓国である、日本とは異なる桜を植えて国家を一つに束ねようとしたと見ることができる。」（ナ・ウンジェ）

キム・ソンハとナ・ウンジェは、朴正熙が親日派であったかどうかについては意見が分かれるものの、彼が桜の植樹を通して韓国人の国民的統合を図り、その方法は日本に学んだと見る点では共通している。そして、その政策についても親近感を持っていることがわかる。

「日本人が植えた桜をみな除去しようとしたのは、日帝強占期への反感からだった。だが、韓国の学者によってソメイヨシノが済州島産ワンボンナムであることが明らかになると、朴正熙が1974年に大々的に植えさせた。ワンボンナム＝ソメイヨシノという事実によって、ソメ

イヨシノに対する反感が消えたのである。そこで朴正熙は『国家のために犠牲になること』を象徴する桜を大々的に植える運動を繰り広げた。すなわち、朴正熙前大統領の『桜の大植樹運動』は『国家のために犠牲になること』を強調するためだった。(チョ・ヒョンゴン)

「サクラ」言説が日本国家のために国民に犠牲を強いるものであったことを喝破したチョ・ヒョンゴンは、朴正熙の「桜の大植樹運動」も同様だったと批判する。この意見からは、朴正熙政権に対する批判的視点が見てとれる。その後の独裁政治を想起しているのかもしれない。

「ソメイヨシノと済州島のワンボンナムが異なるとしたのは2007年以後である。つまり、朴正熙前大統領は日本精神の象徴であるソメイヨシノを韓国固有の種と錯覚して『桜の大植樹運動』をした。1960年代以後、韓国全土で自生種ワンボンナムが多く植えられ、在日同胞がワンボンナムを『私たちのたましい』と表現したことを見て『桜=韓国人のたましい』と考えたのかもしれない。」(ユン・ソンウォン)

在日韓国人の言説を受けて朴正熙が「桜の大植樹運動」を展開したと、ユン・ソンウォンは理解した。

「韓国にも春には周囲を美しく染める桜がある。特に鎮海では1905年に日本人が軍港基地とし、市街地を建設するなかで多くの桜を植えたという。光復後排日感情で一斉に切られたが、ワンボンナムの原産地が済州島であることが明らかになって考えが変わり、以後観光都市計画、在日同胞の寄贈、『桜の大植樹運動』によって鎮海では30万本の桜が毎年咲くようになった。しかし、日本のソメイヨシノと韓国のワンボンナムは異なる種であるとされている。結局、日本から持ち込まれた種が植えられ、今日に至る。だが木の意味と出身を問い、まちがっていたと怒る対象を誤ってはならない。桜は木であるにすぎない。桜は、日本の木であり、日本人を象徴すると見るのではなく、韓国の桜を各自の観点で見る必要がある。すでに韓国でも桜が一人ひとりに意味を持つようになり、春になると全国的に花見が盛んに行われ、多くの人が楽しむ。それこそが桜が持つもっとも大きな意味ではないだろうか。」(イム・ダスル)

確かに桜が韓国の国民統合の手段として使われたとしても、一方では韓国人の情緒のなかに桜が一定の位置を占めるようになり、多くの人が花見を楽しむようになったことを文化的に考える必要があり、桜にすべての責任

を負わせることはできないと、イム・ダスルは主張する。

イム・ダスルの意見は「桜は木であるにすぎない」と、一見するともっとものように読むことができるが、「韓国でも桜が一人ひとりに意味を持つようになり」というように、韓国の現状をひたすら肯定しようとする意識が働いていると見るべきである。

3. 日本の学生が韓国の学生の意見を読む

日本福祉大学の学生9名に韓国の学生の意見について聞いてみた。9名のうちイム・ダスルの意見について5名がコメントをした。そのうちの2名の意見を紹介しよう。

「大植樹運動は、日本のソメイヨシノを植えたことを考えると、木本来の美しさを優先した運動だったように感じられる。光復後は排日感情が優先され、その美しさを考えることができなかったが、ソメイヨシノの原産地が韓国であることを学者が明らかにしたこととこの運動によって、多くの韓国人が桜を楽しめるようになった。桜を美しいと思い、花見を楽しむことは、歴史や戦争に対する考え方が違ってもそれを乗り越えていける感情であると感じた。」(望月理恵)

「ソメイヨシノ=ワンボンナムということに気づき、国民が一丸となって桜を愛でることで国民としての一体感をつくって国民の気持ちを向上させたかったのではないか。桜を切るという行動は、排日という感情を桜にぶつけているだけだ。」(西田美穂)

望月は、解放後の韓国では「排日感情が優先され、その美しさを考えることができなかった」が、大植樹運動によって「多くの韓国人が桜を楽しめるようになった」。このことから、「桜を美しいと思い、花見を楽しむことは、歴史や戦争に対する考え方が違ってもそれを乗り越えていける感情」であることがわかった、という。西田はそれに加えて、朴正熙は「国民が一丸となって桜を愛でることで国民としての一体感をつくって国民の気持ちを向上させたかった」と考えた。

それに対して、ナ・ウンジェを支持した早坂裕明は「かつて日本が各地に桜を植えて日本人の国家意識を統一していったように、桜が本来韓国のものだと国民に主張した上で韓国を統一しようとしたのではないだろうか」と、朴正熙のやり方は日本に学んだことを強調している。

また、片桐達は「朴正熙はソメイヨシノとワンボンナムは異なる種であることを知っていたが、桜を植える運

動を繰り広げることによって、日本のようにワンボンナムを利用して国民意識を植えつけようとした」と、朴正熙にとってはソメイヨシノとワンボンナムが異なっているかどうかは問題ではなく、運動を繰り広げること自体を利用して国民意識を植えつけようとしたのだと主張した。

韓国でも春になると桜を楽しむ人が増えているのだから、桜を「日本の木であり、日本人を象徴する」とだけ見るのではなく、「桜を楽しむ」ことに意味があるとするイム・ダスルの意見は、日本の学生に受け入れられやすい。つまり、「サクラ」言説が果たしてきた歴史を捨象して現状を考えるという思考は、日韓の学生に共通するのかもしれない。

それでも、朴正熙が日本のやり方に学んだとする西田は、それは「国民の気持ちを向上させたかった」からだとか肯定的にとらえる。一方、片桐は、日本に学んだ運動それ自体が国民意識をつくり出す、そして朴正熙政権を支える意識をつくり出す、一つの政策であることは見抜いた。

しかし、「サクラ」言説が日本国家のために国民に犠牲を強いるものであったこと、そして朴正熙の「桜の大植樹運動」も同様だったと批判したチョ・ヒョングォンの意見については一人もコメントをしなかったのはなぜか。学生たちは「国家のために犠牲になる」ということがどういうことか理解できなかったからだという。国家は国民のためにさまざまな政策を繰り広げているのだから、その国家が国民に犠牲を強いるとは考えないのである。

また、日韓の学生の意見は、授業の構成自体に問題があることを如実に表している。植民地時代の「サクラ」言説の果たした役割を捨象したため、現在の韓国（そして、日本）の抱えている課題が見えなくなってしまったのではないだろうか。

4. まとめ

今回の実践では、「サクラ」言説が近代日本の国民統合の手段として使われていったこと、そしてその言説が韓国朴正熙政権による国民統合の手段ともなったことを明らかにした。日韓の学生たちは「サクラ」言説が持たされた歴史について理解しつつ、国民統合に対する自分の意見を述べあうことができた。

また、富士山の実践とはちがって韓国の学生の意見を

日本の学生が分析することによって自らの認識を見つめる機会となった。

だが、「帝国の記憶」としての「サクラ」言説を取り上げられなかったため、「サクラ」言説がそれぞれの歴史に及ぼした影響を関連させて考えることができなかった。

1907年にソウルの^{ウエソンデ}倭城台に、翌1908年には^{チャンギョングン}昌慶宮に300本のソメイヨシノが植樹された³⁰。併合後には、朝鮮神社（後、朝鮮神宮）をはじめ各地に桜が植えられていった。月尾島（^{ウォルミド}仁川）の桜が日露戦争後軍艦を引き上げたときの記念植樹に始まり、^{テグ}大邱の連隊に植えられた桜が「軍人ざくら」と呼ばれて軍旗祭が行われた³¹ように、桜は軍隊とも深く結びついていた。また、ソメイヨシノを中心に植樹されたため、雪害で適応が難しい場合もあった³²。さらに、1920～30年代に始まった旅行ブームも相まって盛んに「観桜大会」が催された³³。

こうして、「京城の桜は日本人と一伴に日本から移植されたものである。そして日本人の数が増すに連れてその数を増し、朝鮮に育ちつゝある日本少年が成長して行くやうに桜の木も大きくなつて来た」³⁴と、「サクラ」言説が支配者としての日本人の朝鮮観を支えていった³⁵。

こうした事実を知りながら、朝鮮の桜ゆえに通俗とする小泉源一の主張に触れてはいるものの、授業者に植民地朝鮮における「サクラ」言説に迫ろうという考えがなかったため、小泉の植民地主義について大学生と考える発想が生まれなかった。

また、先に挙げた小泉の学説を取り入れながら、森為三（動物学者・京城帝国大学予科教授）が「済州島原産の染井吉野が世界中にひろまりつゝある事は我が国威の延張」³⁶であると、内鮮一体を強調する言説に利用していることにふれることはなかった。さらに、韓国の国民的詩人と言われる^{ソヨンジュ}徐延柱が詩を書いて朝鮮最初の特攻隊員松井秀男の死を「君、その身を乗せ飛びたち落つるところノ音をたて聞く美しき花のごとく」と桜に例え、「われらが伍長、われらが誇り」と讃えている³⁷ことから、「サクラ」言説と朝鮮人の特攻隊「志願」の関係についても問題にすることもできただろう。

総じて、戦前の日本のナショナリズムが内包する帝国主義・植民地主義と解放後の韓国ナショナリズムとの関係について考えることができなかったといえる。

関連して、授業で高麗大生に「韓国に花見がありますか」と尋ねたとき、鎮海出身の学生が「高校生のとときま

では花見をしていました」と答えたにもかかわらず、現在の韓国の花見と植民地時代のそれとの関係³⁸に思いを致すことができなかつたため、そこで止まってしまった。

次回を期したい。

注

- 1 拙稿「韓国高麗大生と学ぶ『富士山』の授業 日韓のナショナルリズムのありようとかかわって」、『日本福祉大学 子ども発達学論集』第7号、2015年1月。
- 2 イデオロギーとしてのナショナルリズムの特質については、E. ケドゥーリー『ナショナルリズム』(学文社、2003)を参照。また、「ナショナルな想像力を育むことができるのは、もっぱらトランスナショナルな空間においてなのである」と指摘する林志鉉は、新自由主義の論理で満ちているグローバリズム下に世界各地でナショナルリズムが勃興している現在の状況を、歴史認識の側面から納得的に論じている(林志鉉「国民史の布石としての世界史 日本と朝鮮における『愛国的世界史』と、その結果として生じるヨーロッパ中心主義について」、『思想』1091、2015年3月)。
- 3 中学生の場合は、拙著『韓国・台湾に向き合う授業』(日本書籍、1999)、拙稿「韓国の中学生と学ぶ『秀吉の朝鮮侵略』の授業」(『歴史地理教育』691号、2005年11月)を参照。
- 4 『東奥日報』1900年4月24日。また、弘前城の桜については、高木博志「桜とナショナルリズム 日清戦争以後のソメイヨシノの植樹」(西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、1999)が詳しい。弘前にあった第8師団の招魂祭が日露戦争頃から桜が咲く弘前城で行われるようになり、軍隊と桜が深い関係にあったことなども論じている。また、同「桜」(板垣竜太ほか編『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011)では、桜とナショナルリズム、そしてソメイヨシノをめぐる「帝国の記憶」を論じている。
- 5 弘前公園では、1918年5月3日に「第1回観桜会」が開催され、戦時中を除いて現在まで続いている。ただし、1961年からは「弘前さくらまつり」と改称されている(弘前大学人文学部人文学科人間行動コース編『人間行動研究2 弘前さくらまつり報告書』、1993)。
- 6 日本さくらの会『日本のさくら さくら名所100選』財団法人日本さくらの会、1990。さらに、学校の校庭にもソメイヨシノが植えられていく。例えば、鳥取県立米子高等女学校(現県立米子西高等学校)では、その草創期(1911年)に正門前の通学路に桜並木がつくられた(同校創立八十周年記念誌編纂委員会編『創立八十周年記念誌』鳥取県立米子西高等学校、1987、19ページ)。千葉県本埜尋常高等小学校(現現伊西市立本埜第一小学校)の大桜は、1920年に「教育勅語30年記念」として植えられたという(本埜村教育委員長談)。さらに、神奈川県南秦野村立尋常秦野南小学校(現秦野市立南小学校)創立時(1892年)にソメイヨシノが植えられた(神奈川県教育庁文化財保護課編『かながわの名木100選』神奈川県合同出版、1987、146

ページ)。

一方で、「咲き揃った所は壮観であるから、世の嗜好に適していたが」、「山桜のやうに若葉の色の変化が無くて単調」だという美濃出身の植物学者三好学は、山桜こそ「桜の中の桜と謂ふべき」とする(三好学『桜』富山房、1938、66~70ページ)。新参のソメイヨシノよりも山桜に価値があるというのである。ところが、その三好が著したガイドブックには「ソメイヨシノは、満開のときには見事な風景を表す」とし、扉絵には弘前城の桜を配置している(Manabu Miyoshi, Sakura: Japanese cherry Board of Tourist Industry, 1934)。つまり、三好は、自分が好む山桜よりも城とソメイヨシノという、まさに近代の景観を日本文化と意識していたことがわかる。

だが、「桜守三代」として知られる佐野藤右衛門(16代)は、ソメイヨシノを「画一化した全国チェーンの店」と揶揄しつつ、各地にソメイヨシノばかりが植えられて「その土地の香りが失せてしまいますんや」と批判している(鈴木嘉一『桜守三代 佐野藤右衛門口伝』平凡社新書、2012、148~152ページ)。佐藤藤右衛門『桜のいのち庭のこころ』(草思社、1998)には彼の桜観がよく現れている。

- 7 「特に将来に於る国民教育の為に、全国の各学校をして内外共に見易き所を撰び、征清記念樹を栽植せしむるの必要を説くものなり。而して其栽ふる所の樹木は、古来我日本魂の表章たりし、彼桜樹を以て最恰当なりと信ずるなり」(『教育時論』348号、1894年12月)。また、『教育時論』が市民主義的教育から国家主義的教育を標榜するに至った過程については、林三平「『教育時論』における国民教育論の動向 明治教育政策史覚書(二)」(『青山学院女子短期大学紀要』22号、1968年11月)を参照。
- 8 木戸孝允が1871年に靖国神社にソメイヨシノを植えたことになっている(靖国神社掲示板「東京に春を告げる『靖国の桜』」)が、室田老樹齋の調査によれば、1880年頃とされる(山田孝雄『櫻史』講談社学術文庫、1990、417ページ、[『櫻史』の初出は桜書房、1941])。
- 9 『尋常小学読本巻九』、1911(海後宗臣『日本教科書近代編第7巻 国語(4)』講談社、1963、152ページ)。
- 10 小学校の場合、1891年の文部省調査によると、全国47道府県のうち4月1日の始期がおよそ60%、残りは1月、5月、8月、9月、11月とばらばらであった(佐藤秀夫「学年始期の統一化過程 学校接続条件の史的考察」、『国立教育研究所紀要』第117集、29ページ、31ページ)。東京本郷区の誠之小学校の学校日誌によると、「入校式」[入学式のこと]が初めて行われたのは1903年4月1日だという(寺崎昌男監修『誠之が語る近現代教育史』第一法規、1998、400ページ)。

さらに、ソメイヨシノの咲かない沖縄や北海道で使われた教科書でも桜についての単元が設定されている。ただし、「桜の花は、其色大ていうす赤くして」と桜について説明しなければならなかった(『沖縄県用尋常小学読本巻七』、1899(佐藤秀夫監修『地域教育史資料第一期3』文化評論社、1984))。北海道でも同様であった(『北海道用尋常小学読本巻五』、1897(同、『地域教育史資料第一期1』))。

そして、1941年の国民学校令によって教科が大きく改

- 編された国定教科書第5期国語教科書(一年生)の最初のページには、満開の桜の下で子どもたちが体操をしている場面があり、その次に「ヒノマルノハタ バンザイ バンザイ」、「ヘイタイサン ススメ ススメ」というページがある(『ヨミカター』, 1941 [海後宗臣『日本教科書近代編 第8巻 国語(5)』講談社, 1963, 331~333ページ]). 戦争動員のために「サクラ」言説がさらに直載に語られていることがわかる。
- また、音声学者大西雅雄は、「サイタサイタ サクラガサイタ」以後の一連の文を例にあげながら音節や抑揚についての授業法を論じている(『教育音声学』文学社, 1936).
- 11 城丸章夫『星とさくらと天皇と』新日本新書, 1990, 15ページ.
 - 12 日本戦没学生記念会編『きけ わだつみのこえ 日本戦没学生の手記』岩波文庫新版, 1995, 365ページ.
- また、特攻隊出撃にあたって和田稔(東大卒)は日記に「同期の桜」を引き(『わだつみのこえ消えることなく 回天特攻隊員の手記』角川文庫, 1973, 252~253ページ), 市島保男(早大卒)は桜を詠んだ歌を残している(海軍飛行予備学生第14期会編『あゝ同期の桜 かえらざる青春の手記』毎日新聞社, 1966, 124ページ). こうした分析に対して、岡田裕之は「戦没学生がこの桜=象徴に動かされて戦死を受容した、とは到底思えない。これはむしろ職業軍人や勤労者兵士に適用できるのではないか」と批判している(岡田裕之「日本戦没学生思想(上)」、『大原社会問題研究所雑誌』578号, 2007年1月).
- 13 桜を利用した国家主義の形成については、大貫恵美子『ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義』岩波書店, 2003. さらに、大貫は、その続編とも言うべき『学徒兵の精神史「与えられた死」と「生」の探求』(岩波書店, 2006)で、桜をめぐる「誤認」と国家主義の浸透との関係を興味深く論じている.
- しかし今、「サクラ」言説の影響について顧みられることはほとんどない。例えば、現在の日本の桜について網羅的に紹介している『新日本の桜』でも、ソメイヨシノが多様な桜への関心を削いでいることを批判しても、「ソメイヨシノは入学や入社の頃に開花し、しかも一斉に咲き、散るため、花見に適していたのであろう」(大場秀章「日本のサクラの歴史」、『新日本の桜』山と溪谷社, 2007, 248ページ)と、意図的なイデオロギー形成と桜のかかわりについては関心を向けない。
- 14 斎藤正二は、佐藤太平『桜と民族』(大東出版社, 1937), 高木武『日本精神と日本文学』(富山出版, 1938), 和辻哲郎『風土 人間学的考察』(岩波書店, 1935)などを分析しつつ、「サクラの美を“散りぎわ”の潔さという局所に絞って、これを礼賛し、かつ、これを以て日本人の国民性の象徴とする議論が、だいたい1930年代後半から出揃ってくる」と喝破した。斎藤正二『日本人とサクラ』講談社, 1980(ただし、引用は『斎藤正二著作選集 5』八坂書房, 2002, 114ページ).
 - 15 5社の小学校国語教科書のうち、桜を前面に出しているのは、学校図書と光村図書の2社だった。さらに、ほとんどの生活科教科書(1年生)で桜を取り上げ、「サクラ言説」を補強している.
 - 16 桜前線の地図は、佐藤俊樹『桜が創った「日本」 ソメイヨシノ起源への旅』岩波新書, 2005, 18ページ. 本書は、ソメイヨシノが「日本」のナショナリティの表象として位置づけられ、そのナショナリティが再編成されていった過程について論じている. なお、気象庁による「さくらの開花予想」が全国を対象に行われるようになったのは1965年から、東京の開花予想はそれより早く1951年からである. ソメイヨシノが桜の標準として気象台の「開花予想」に採用されたのは1917年頃からで、大邸の測候所でもソメイヨシノをもとに開花期日を予報するようになったのは1926年のことだった(高木博志『桜』, 前掲書).
 - 17 これは、「富士山」言説と同一の構図である. 拙稿「韓国高麗大生と学ぶ『富士山』の授業 日韓のナショナリズムのありようとかかわって」参照.
 - 18 この紙袋の裏面には「保護者の皆様へ」として「お子様の御入学おめでとうございます. /この教科書は、義務教育の児童、生徒に対し、国が無償で配布しているものです. /この教科書の無償給与制度は、憲法に掲げる義務教育無償の精神をより広く実現するものとして、次代をになう子供たちに対し、わが国の繁栄と福祉に貢献してほしいという国民全体の願いをこめて、その負担によって実施されております. /一年生として初めて教科書を手にする機会に、この制度にこめられた意義と願いをお子様にお伝えになり、教科書を大切に使うよう御指導いただければ幸いです. /文部科学省」という文言が印刷されている.
 - 19 花見の風習が庶民に広まったのは、徳川吉宗が浅草隅田川堤や飛鳥山に桜(ヤマザクラ)を植えさせ、庶民の行楽を奨励した18世紀以後だという(山田孝雄, 前掲書, 303~304ページ). また、白幡洋三郎『花見と桜 日本のなるもの 再考』(PHP新書, 2000)は、「群桜」、「飲食」、「群集」の三つの要素が備わってこそ日本の花見が成立するとし、花見と日本の高度経済成長の関連についても論じている.
 - 20 本居の歌の評価や、桜と日本の短歌(歌)との関係については、水原紫苑『桜は本当に美しいのか 欲望が生んだ文化装置』(平凡社新書, 2014)参照. 桜にかかわる言説の歴史については、有岡利幸『桜』(法政大学出版局, 2007)を参照. また、日本の桜のうちヒマラヤザクラだけは秋咲きである. このことから日本の桜も古くはネパールなどを原産として、250種以上の品種の桜が日本で生まれたとする植物学者もいる(染郷正孝『桜の来た道 ネパールの桜と日本の桜』信山社, 2000). たとえヤマザクラであっても、「ヤマザクラ系統の本場は、大和付近ではないか」(小清水卓二『万葉の草・木・花』朝日新聞社, 1970, 23ページ)とその始原を設定してしまうと、中心から周辺へ伝播するという思考となり、それは「サクラ」言説そのものとなる. ヤマザクラは環東シナ海地域の桜だからである.
 - 21 「鎮海地域李忠武公護国精神宣揚会」の主催で開かれる鎮海の軍港祭は、1952年に李舜臣^{イムスンシン}の銅像が建てられ、追慕式を催したことから始まったが、1963年頃から現在のようによくの観光客を集めるようになった.

- 22 竹国友康『ある日韓歴史の旅 鎮海の桜』朝日選書, 1999, 236~238 ページ.
- 23 小泉源一「染井吉野桜の天生地分明す」, *Acta phytotaxonomica et geobotanica* 1 (2) [『植物分類・地理』第1巻2号], 1932.
- 24 「染井吉野というサクラ」, 『遺伝』12巻11号, 1958. 「染井吉野の起源」, 同13巻4号, 1959. 「ソメイヨシノの合成」, 同16巻4号, 1962. この学説の弱点は「親木」=原木を特定していない点である. この点で, 勝木俊雄『桜』(岩波新書, 2015)は, ソメイヨシノが短命であるという俗説を批判しつつ, 傍証でしか議論されてこなかったソメイヨシノの起源も中国・韓国を含めた地域での研究が必要だとする提案は参考になる. ただし, 本書で韓国の「ワンボンナム」を「ワングボツナム」(61~62ページ)と表記しているのは誤りである. 原木に関しては, 中村郁郎ほか「上野公園のソメイヨシノ原木候補について」(日本育種学会2015年春季大会記者発表資料)が, 上野公園のソメイヨシノが原木候補である可能性が高いとしている.
- 25 Hideki INNAN, Ryohei TERAUCHI, Naohiko T. MIYASHITA and Koichiro TSUNEWAKI, "DNA fingerprinting study on the intraspecific variation and the origin of *Prunus yedoensis* (Someiyoshino)", *Japanese Journal of Genetics*, 70, 1995, pp.185-196.
- 26 岩崎文雄「ソメイヨシノとその近縁種の野生状態とソメイヨシノの発生地」, 『筑波大農林研報』3, 1991, 95~110ページ. また, 現在のソメイヨシノを「染井吉野」と名づけたのは東京帝室博物館職員(当時)藤野よりなが寄命「上野公園桜花の種類」(『日本園芸雑誌』92号, 1900)であり, その後松村じんぞう任三(小石川植物園初代園長)が学名(*Prunus yedoensis*)をつけて『植物学雑誌』(第15巻, 1901)に発表した(論文名は, *J. Cerasi Japonicae duae Species novae*). ただし, 「つくり上げた」のかどうかは不明である.
- 27 Mark S. Roh, Eun Ju Cheong, Ik-Young Choi, Young Hee Joung, Characterization of wild *Prunus yedoensis* analyzed by inter-simple sequence repeat and chloroplast DNA, *Scientia Horticulturae* 114 (2007), pp.121-128.
- 28 http://news.kbs.co.kr/news/NewsView.do?SEARCH_NEWS_CODE=2843708&ref=A (2014年10月28日10時30分検索)
- 29 <http://www7b.biglobe.ne.jp/~cerasus/korea%20cherry%20report/korea%20cherry%20report-3.html> (2014年7月23日18時30分検索)
- 30 京城師範学校教諭上田常一「京城の桜の来歴(上)」, 『京城日報』1933年4月27日. 上田は, 「幹の太い点に於いて或は花付きの極めて著しい点に於て昌慶苑の桜はナンバーワンである」と絶賛している[同(下), 4月28日]. また, 昌慶宮が昌慶苑に変えられる過程は, 朴昭炫「帝国の趣味 李王家博物館と日本の博物館政策について」(『美術史論壇』第18号, 2004上半期, 韓国語)を参照.
- 31 「花吹雪の下で栄えある軍旗祭 大邱連隊の営庭に展かれた朗かな軍国絵巻」, 『京城日報』1934年4月19日.
- 32 「今年は桜は咲かぬ 吉野桜は死んで居る, 朝鮮桜は被害渺し」, 『京城日報』1922年4月1日.
- 33 「京城の春を訪ねて一日の行楽にふける 汽車賃半額臨時列車運転 大田支局主催観桜大会」, 『京城日報』1926年4月11日. 同日の『京城日報』紙面は, 「隠れた花の名所 長城の桜」, 「咲いた咲いた鎮海のさくら ゴツタ返す桜の馬場」, 「清州の桜 夜桜の趣向」など, 桜の記事で埋め尽くされている.
- 34 英夫「花の京城より 大阪に住む三人の弟へ」, 『朝鮮と満洲』119号, 1917年5月.
- 35 さらに, 例えば桜の会常務委員井下清は, 論文「国家進駐」を書き, 「この大和民族の心意気を表はす桜花を日の丸の国旗と共に我国民発展の地に移し植へ, 人花共に其地に永く栄へ, 土民をも薫化し皇威の宣揚に貢献せしめんと希ふ」(『桜』22号, 1942, 6ページ, 非売品)と日本が侵略した土地には桜を植えるべきだと主張する. 雑誌『桜』は「時局に鑑み」翌1943年から『梅と桜』となり(『編集後記』, 『梅と桜』1号, 1943, 48ページ, 非売品), 井上は梅桜会理事長となる. 桜の会編『雑誌桜 昭和版第3巻(第17~23号)』(有明書房, 1981, 復刻版)を参照.
- 36 森為三「朝鮮の桜」, 『朝鮮と満洲』1933年5月号.
- 37 徐延柱「松井伍長頌歌」, 『毎日新報』1944年12月9日.
- 38 例えば, 金炫淑(キムヒョンスク)「昌慶苑『夜の花見』と『ヨザクラ(夜桜)』」(『日韓近代美術史シンポジウム報告書 都市と視覚空間 1930年代の東京とソウル』明治美術学会, 2009)では, 日本が名称ばかりではなく内実も含めて昌慶宮を昌慶苑に変えた(1911年)ことを「朝鮮王朝=過去/封建/廢墟をイメージさせ, 日本=未来/近代/ユートピアであるということ視覚的に再現するものだった」と, 的確に指摘している. ところが, ソメイヨシノ=ワンボンナム(王桜)と無批判に受容しているため, 現在の韓国ナショナリズム 植民地主義と通底する側面があるを批判することができない. また, 「昌慶苑の夜桜」は当時朝鮮でもかなり知られていて, 交通規制も敷かれるほどであった(「昌慶苑の夜ざくら 十八日頃開場 準備を急ぐ」, 『京城日報』1936年4月9日).